

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第12号

目次

大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)の設立経過とその将来像 荒井 明夫 ……………	2
「今」「これから」の京大生に京都大学の歴史を教える —『現代の大学・大学生論』という授業— 清上 慎一 ……………	4
非現用法人文書の廃棄状況 河西 秀哉 ……………	6

日誌 ……………	8
大学文書館の動き： 『学友会関係資料』および『第三高等学校関係資料』の公開を開始します ……………	9
京都帝国大学法科大学教授・新渡戸稲造 —その着任と転任の一齣— (下) 清水 善仁 ……………	10



学生集会所

学内の集会場として東山近衛北東角に1911(明治44)年に竣工した。当時、文化系の親睦団体だった以文会(のち運動会と合併して学友会となる。現在の文学部同窓会とは別)によって盛んに行われていた茶話会・講演会の会場となり、学生の文化運動の中心となった。現在もクラブ活動に使用されている。

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）の 設立経過とその将来像

大東文化歴史資料館運営委員 荒井 明夫

はじめに

大東文化大学は、東京都と埼玉県との境である板橋区および埼玉県東松山市にキャンパスを有する、8学部19学科、学生総数約13,000人の総合大学です。2006年4月、「大東文化歴史資料館(略称・大東アーカイブス)」が設立、オープンしました。

京都大学大学文書館はじめいくつかの大学には設立準備過程で見学させて頂くなど、大変お世話になりました。この機会に厚く御礼申し上げ、設立までの経過・取り組み・将来像などを報告させていただきます。

1、大東アーカイブス設立経緯

1997年に寺崎昌男先生が本学理事に着任されたことを機に、大東にアーカイブスを創設しようという声が大学内から起こるようになり、その頃に学長室員に着任した私は「学園関係資料の収集・整理・保存」を軸に「展示」・「百年史編纂」・「自校史教育」を活動の柱とするアーカイブス設立構想を提言した。だが、諸般の事情で展示室や事務室などスペース確保が困難となる中、キャンパス再開



大東文化歴史資料館展示室

発に際して一気に計画が動き始める。

2004年6月、学校法人大東文化学園理事長の諮問により、教員4名と総務部総務課職員2名、それに寺崎昌男氏を特別顧問として歴史資料館設立プロジェクトチームが発足。精力的に仕事を重ね、同年7月には成蹊大学・明治大学、翌8月には京都大学・同志社大学・関西大学・神戸女学院大学のアーカイブスを訪問・見学した。他大学のアーカイブスの見学・訪問は、大学アーカイブスに関する共通認識を得る上で大きな成果となった。「大学はアーカイブスの存在によって初めてその個性を認識しうる」と同時に「アーカイブスは大学の環境・歴史的社会的位置等によって性格規定される」ということを改めて発見した。これ以後チームは「アーカイブスを大東にどのように創るか」という問題の立て方ではなく「大東文化に適ったアーカイブスをどのように創るか」と変化したように思う。

2005年1月、理事長宛文書を提出し承認を得てチームは4月に開設準備委員会に改組する。教員スタッフが補充され、6月には理事会に答申を提出、2006年4月に正式発足する承認を得た。発足に先行し11月に「花開く学生文化」をプレ展示、学内世論を高めることに成功した。

2006年4月、渡部茂副学長を館長として教員7名・学識経験者3名・第一高等学校教員・総務部職員を構成員とする第一回運営委員会を開催、「学びの80年」と題する本格展示を開催して正式発足した。同時に東松山校舎で自校史教育である講義科目「現代の大学」も開講した。

2、大東アーカイブスの特徴

大東文化学園・大東文化大学は、その前身である大東文化学院が1923年に創設されている。これまで『大東文化大学五十年史』や『大東文化大学七十年史』が刊行されているが、刊行後に刊行主体組織が解散、史料も散逸してしまった。多くの大学が百年史編纂後にアーカイブスを組織している中、本学の場合、百年史編纂に先行してアーカイブスを組織することで50年史・70年史編纂の教訓を活かすことが可能となった。いいかえると百年史編纂の中核組織としてアーカイブスが位置付けることができる。これが最大の特徴ではないかと思う。第二は発足と同時に展示と自校史教育を先行させることができた点だ。第三の特徴はプロジェクトチーム発足以来の恵まれたスタッフ構成にある。教員はもちろんだが、サポートしてくれた職員の献身的な活動、経験ある非常に有能な嘱託職員の配置など、少人数だが大東アーカイブスならではのスタッフ配置ができたと思う。

3、大東アーカイブスのこれまでの主な活動と当面の課題

プロジェクトチーム発足以後開館に至るまで要した時間が1年10カ月。開館後まもなく1年を迎える中、主として以下のような活動を展開した。まず前提として嘱託職員1名を確保、展示スペースと史料保存スペース・事務室などの物理的空間をひとまず確保したこと。あらゆる活動の拠点が構築できたことである。その上で第一に展示を先行させ学内世論を盛り上げることができたこと。第二に卒業生や学長も講師として参加する自校史教育・講義科目「現代の大学」を開講させることができたこと。第三に新しくニューズレターを発行し学園・大学史に関する本格的資史料収集を始めたこと、である。

これらの活動を、長期的視野の中で位置付け発展させることが今後の活動であるが、独自に力を入れるべき課題として、学園・大学史に関する本格的資史料収集の開始がある。

本学の設立等々の資史料を大規模に収集すること。そのためにも大東アーカイブスを教職員・学生・学生父母・卒業生や近隣住民に広く認知してもらう広報活動が大切である。さらにそれらを展示や自校史教育に活用させることである。そして百年史編纂体制の構築や文書（ブンショ）館としての機能をどのようにもたせるかということの研究である。これらの課題は他大学から学びたいと考える。これらの活動を通じて環境整備への努力を怠らないことはいうまでもない。

おわりにー大東アーカイブスの将来像私案ー

大学の個性発揮がさまざまなレベルで求められている今日、アーカイブスはその最大の手がかりを与えてくれると確信しています。中でもその大学が力を入れている学問領域・個性との関係でみるのが大切ではないかと考えます。大東文化大学の場合、近代日本漢学史や政治史の中での位置付けが可能のように思えます。創設にあたり、衆議院における「漢学振興の決議」に基づいて、前身である大東文化協会が創設されたという史実があるからです。また、大学が存在する地域である東京都板橋区高島平地域と埼玉県東松山市の地域と、大学との関係を歴史的パースペクティブにおいて捉えることもアーカイブスの将来像を考えるヒントになるように思えます。

いずれにしても発足間もない若い大学アーカイブスです。今後とも先達の大学アーカイブスから学ばせて頂きたいと思います。

「今」「これから」の京大生に京都大学の歴史を教える － 『現代の大学・大学生論』 という授業－

京都大学高等教育研究開発推進センター准教授 溝上 慎一

授業で考える「今」「これから」の京都大学

西山伸先生（大学文書館准教授）と『現代の大学・大学生論』という授業をおこない始めて6年が過ぎた。他大学の大学文書館の多くでは当該大学の歴史を授業で教えているが、少なくともこの授業で京都大学の歴史を教える理由は、昨今めまぐるしく変わる大学教育の趨勢のなかで、自分は京都大学をどのように理解し、京都大学でどのように学ぶのかを考えてもらおうと意図しているからである。あくまで起点は、「今」を生きる学生たちの「これから」の姿にある。もちろん、そうは言っても、単純に「京都大学の歴史を知りたい」という学生も歓迎である。

2つの柱がこの授業には必要であった。1つは、京都大学の歴史を帝国大学時代に遡って教えることであり、もう1つは、現代の大学教育改革の趨勢、そして海外の中での日本の高等教育の位置、ひいては京都大学の状況について教えること、であった。日本を代表する京都大学で学ぶ学生たちなのであるから、単に京都大学に入って良しとするのではなく、京都大学が日本のなかで歴史的にどのような使命を課せられそれを果たしてきたか、そして、これから全世界的な国際競争のなかでどのような使命を果たすべきだと考えられているか、それを知り自分の頭で何が大事かを考え、これからの京都大学の発展に資する学生となって欲しい、そう願って授業は始められた。

1つ目の柱を担当できるのは西山先生しかなかった。所属する学部や研究科を中心とする京都大学の歴史は、多くの方々のご自身の経験とともに理解されていることであろう。しかしながら、大学文書館に務める西山先生は、それに加えて、他学部、全学のほぼあまねく文書や資料に目を通され、それを研究、整理されている方である。どれだけ長く京都

大学にいる方よりも、京都大学を知り尽くされている方である。他方、私は、京都大学の歴史については一般的なことしか知らないが、昨今の京都大学をはじめ、それを取り巻く国内外の高等教育事情については、所属部局の専門性ゆえよく知っている一人である。この二人でタッグを組んで授業をしようというのが、『現代の大学・大学生論』であった。

京都大学固有の歴史はどこまで？

現在西山先生には、京都帝国大学の設立（1897年）の前後から1960年代末の大学紛争期までを担当して授業をおこなってもらっている。だから、シラバスに書かれている大枠のテーマは「1. 帝国大学の始動と京都帝国大学の創立」「2. 国家と大学－滝川事件－」「3. 戦時中の大学、出兵する大学生」「4. 新制大学発足期の京都大学」「5. 大学紛争とその背景」となっている。とくに、先生の近年の研究成果をもとにした「出兵する大学生」は圧巻である。学生たちも真剣に耳を傾けて聞いている。そして、1960年代の大学の大衆化から現代高等教育事情までを私が後半で担当する。しかし、こういう2段落構成に落ちついたのは授業を開設して3年目くらいのこと、はじめの2年間は試行錯誤が続いた。

私たちのこの試行錯誤は、京都大学の歴史を教えるという本稿のテーマを考えるのに意味がある。はじめの2年間は、東京大学（帝国大学）設立から現代の高等教育改革に至るまで、西山先生と私が担当できる内容をほぼ2回ずつで交代して授業をおこなっていた。ところが、私の担当する戦前期の大学・大学生事情は概論の域を越えず、いわゆる裏話にまで突っ込んで話ができないだけに何ともおもしろみに欠けるものであった。専門性を考えれば当然のことであったかもしれない。そこで、西山先生には大学紛争期までを集中し

て担当してもらい、その後の現代までの高等教育を私が担当するというように授業構成を変更した。

ところが、この変更は、お互いの持ち分を活かしたというだけでは語り尽くせない意味を包含していた。というのも、西山先生の京都大学を中心とする大学史を、京都帝国大学設立以来より通史で拝聴したが、大学紛争期以降の京都大学の大学史というのは、どうも京都大学独自の大学史というものがあるようでないようなという印象を受けるものだったからである。つまり、戦前期の自由の学風、独自の大学教育システム、京都学派など京大独自の歴史が語られ、かつ、戦前の文脈を捨象しては語り得ないという意味で、戦後のノーベル賞受賞などもその延長線上に位置づけられる。ところが、おおよそ大学紛争期ないしは世の中の大学が大衆化したあたりの頃から語られる京都大学の歴史は、極端に「京大らしさ」というものを失っていくように見えるのである。たとえば、1969年の時計台を占拠した大学紛争や1991年の大学設置基準改定にともなう教養部廃止、総合人間学部設立、全学共通教育体制の確立などを思い浮かべればわかるように、京都大学独自の政策や事件というのはたしかにあっても、それは何も京都大学だけをもって語られるものではないし、こうして京都大学で起こっていることは多かれ少なかれこの大学でも起こっている。京都大学のユニークな特徴があるとしても、それは他大学にそれが無いことを意味しない。そういう意味では、戦後の京都大学の歴史というのは、言い過ぎであるかもしれないが、全国一般化されたなかでの相対的な優位性、突出性でしかない。

いや、私はこの点を否定的に言うてはいない。京都大学だけが突出して独走する態勢など、現在の状況ではあり得ない。ある一つか二つの突出した研究成果や政策で、他のすべてを圧倒することのできる時代ではなくなっているのだ。そういう現状認識をもった上で、これからの京都大学を考えていく上での素材にすれば良い。今日の課題はここにある。

ハーバード大学の卒業式を見て

嫌がられることの多い話だが、この授業を

通して考え続けてきたことを書いて結びとしたい。先日、ハーバード大学の卒業式の映像を見た。人生の栄誉を勝ち取ったかのような喜びぶりである。この喜びの背後には、彼らが4年間落ちこぼれることなく勉学に進進し、それを通り抜けた達成感がある。卒業生が社会や研究の世界で見せるあの自尊心は、単にハーバード大学を卒業したということだけではなく、その過程で高いハードルを頑張って乗り越えてきた達成感に裏打ちされている。よくアメリカの大学は入り口は易しく出口は厳しいと言われるが、それはコミュニティ・カレッジかそこらの話であって、伝統のあるハーバード大学の入学競争率は驚くほど高い。10倍以上の最難関である。京都大学の卒業式にこの達成感は漂っているだろうか？

私は、一部の学生たちの秀逸なマンパワーに依存してやってきたのが京都大学の歴史だと見ている。実際、そうした学生を集められる威信と魅力ある教授陣、教育システムが京都大学にはある。しかし、他方でほんとうならもっと伸びても良かったはずの少なくない学生たちが、伸びきれずにくすぶってきたのも京都大学の歴史である。この過程に影響を及ぼしているのは教育観だ。自由の学風をはき違えるなという議論は上層部ではなされているが、それがまったくローカルな教育現場におりてきていない。自由であって良いのだが、勉強をしない自由はあってはならない。大学はまずもって学問をする場所だ。昨年実施したJCSSという全国大学生調査結果は、自由の学風を謳う京都大学の2回生学生(1044名)で、授業外学習を1週間に3~5時間以下しかしない者が65%もいる実態を明らかにし、関係者を当惑させた。2回生は全学共通教育の授業からやや解放され、学業に対する態度の真価がもっとも問われる学年である。これでいいのだろうか。

アメリカが良いとは言わない。しかし、ハーバードのあの卒業式の光景は気になる。学生たちがいかに充実した学業生活をこの京都大学で過ごすことができるか、私は授業を通して引き続き模索していきたいと思うのである。

非現用法人文書の廃棄状況

京都大学大学文書館助教 河西 秀哉

京都大学では2001年度（部局については翌年度）より、前年度に保存期間が満了した非現用法人文書の大学文書館への移管を行ってきた。移管がシステムとして定着してきた現在は、毎年約8000から9000冊の文書が実際に大学文書館へ搬入されている。しかし、すでに大学文書館の書庫の収容能力は限界に達しつつあり、今後の移管文書のスペースを確保するため、文書の評価選別・廃棄の必要性が出てきた。こうした措置は文書の効率的な管理を実行する点からも必要であるとともに、日々作成・収受される京都大学の文書のうち何を後世に残すか判断する重要な業務であるとも言える。大学文書館では2004年度より3回にわたって移管法人文書の一部を評価選別し、廃棄してきた。

特に部局の文書を保管している近衛館のスペースが不足していることから、現在は部局文書のみを廃棄の対象として評価選別を行っている。なお、評価選別の判断が後にわかるように文学部・法学部はサンプルとして残し、廃棄対象から除外した。

現在のところ大学文書館で廃棄対象としている文書は、現用時の保存期間が10年未満（または不明）のもので、移管時に部局からの保存希望が付いていない（または保存希望年限の過ぎた）ものである。ではどのような文書を残し、どのような文書を廃棄するのか。大学文書館では、「部局としての方針に関わるもの」「部局の教育・研究の具体的内容に関わるもの」「学生生活に関わるもの」「部局から特に保存希望のあるもの」「京都大学の歴史において価値のあるもの」を保存する文書の基準とし、逆に「事務本部・他部局に原本があるもののみで綴じられたもの」「部局

の教育・研究内容と直接関係のないもの」を廃棄することとした。この基準によって廃棄対象とされる文書の具体的内容が表1である。

表1 廃棄対象となる文書の具体的な内容

- ・郵便物発送・受領、切手受払簿
- ・旅行伺
- ・休暇簿、超過勤務命令簿等
- ・給与簿、給与関係（10年保存のものは除く）
- ・兼業関係
- ・諸手当、社会保険、退職金、共済、扶養控除など福利厚生関係
- ・源泉徴収票
- ・宿舍関係
- ・入構駐車許可、構内安全などに関するもの
- ・点検報告書
- ・契約関係
- ・支出負担行為書、物品命令書
- ・科学研究費、委任経理金、受託研究の伝票綴
- ・債権発生通知書
- ・「庶務関係綴」「人事関係綴」「研究協力関係綴」などのうち、事務本部各課からの通知のみであり、部局の実情を示すような回答の含まれないもの
- ・他大学などからの公募書類（教員、共同研究者、助成金などの公募で応募のないもの）
- ・印刷物、刊行物の原稿やゲラ

こうした基準に従って、大学文書館教員が1冊1冊の文書を確認して評価選別する。その際、1枚でも保存基準に満たす書類が綴じられていた場合は、その文書1冊ごと保存することとしている。評価選別を経て決定した廃棄予定文書を部局に照会し、部局からの保存希望文書があればそれを除外している。それ以外の文書が実際の廃棄対象となる。2004

年度には21732冊中5191冊(23.9%)、2005年度には22096冊中9116冊(41.3%)の文書を廃棄した。

2006年度の結果は表2で示した。教員による評価選別では5246冊を廃棄予定文書としたが、部局から37冊の保存希望があったため、実際には5209冊(28.9%)を廃棄することとなった。このうち、前年度に移管されてきた文書は3785冊を廃棄した。これは前年度移管冊数の66.5%に達している。このように近年に移管された文書の廃棄率が高いのは、移管文書が科学研究費の伝票、支出負担行為書や物品命令書など、現在の大学文書館の基準では廃棄対象となっているものの割合が多いためである。

表2 2006年度評価選別の結果

	文書冊数	廃棄冊数	廃棄率(%)	文書冊数中05年度移管数	05年度移管のうち廃棄数	05年度移管の廃棄率(%)
教育学部	445	229	51.5	81	48	59.3
薬学部	1092	506	46.3	189	116	61.4
人文研	449	138	30.7	105	84	80.0
基礎研	240	51	21.3	87	22	25.3
ウイルス研	293	162	55.3	134	115	85.8
経済研	494	191	38.7	106	78	73.6
原子炉	319	237	74.3	189	169	89.4
霊長研	214	48	22.4	0	0	0
東南アジア研	581	227	39.1	206	155	75.2
学術メディア	364	206	56.6	178	149	83.7
医短	592	171	28.9	129	85	65.9
図書館	620	299	48.2	100	89	89.0
工学部	2147	782	36.4	1238	762	61.6
農学部	2340	484	20.7	571	470	82.3
病院	559	203	36.3	279	187	67.0
理学部	2939	309	10.5	593	301	50.8
宇治	1445	459	31.8	778	453	58.2
総人・人環	680	232	34.1	264	229	86.7
医学部	884	142	16.1	284	140	49.3
再生研	654	119	18.2	148	119	80.4
数理研	690	14	2.0	34	14	41.2
全体	18041	5209	28.9	5693	3785	66.5

経済学部は05年度に移管がなかったため、評価選別の対象とせず
 霊長研は05年度に移管がなかったため、05年度は評価選別の対象
 文書がない

最後に京都大学における今後の評価選別・廃棄の課題を提示しておきたい。第一に、現在の廃棄基準で評価選別を継続した場合、次第に廃棄冊数は減少し、最終的には書庫の収容容量の限界に達する。つまり、現在の廃棄基準をより高度にしていかなければ、移管を継続することが困難になるのである。第二に、事務本部から移管された文書の書庫も限界に達しつつあり、この評価選別も必要となってくる。この場合、現在の部局の基準のまま評価選別・廃棄を行ってよいのかという問題が生じるだろう。第三に、各部局にとって保存してほしい文書とは何かを私たち大学文書館がより深く知り、評価選別の基準に反映させることである。評価選別の基準の策定・精緻化にあたって、これは最も重要なことである。そして、大学文書館が評価選別・廃棄の基準や結果をより明確に説明できる責任を有する必要がある。第四に、1枚でも保存基準に満たす書類が綴じられていた場合の判断である。ファイルを解体して保存するという方法も考えられるが、問題を根本から解決するためには現用段階でのファイリングの方法から検討する必要性が生じてくるのではないだろうか。こうした課題は大学文書館のみで解決するものではなく、各部局の事務担当者との密接な連携が必要となる。関係各位からの意見・協力をお願いする次第である。

[日誌] (2006年10月～2007年3月)

- 2006/10/3 化学研究所創立80周年記念展示「終わりなき知への挑戦—過去・現在そして未来へ—」開催(～11月5日。於京都大学百周年時計台記念館歴史展示室)。
- 10/5 明治大学史資料センターより、閲覧業務等視察のため来館。
- 10/12 西山助教授、全国大学史資料協議会2006年度総会・全国研究会に出席(於広島大学)。
- 10/16 大学文書館教員会議。
- 10/18 清水助手、第2回アジア太平洋アーカイブズ学教育国際会議に出席(～20日。於学習院大学)。
- 10/20 白須照高氏より、『青春の母子草 白須友浩を偲ぶ』を寄贈。
- 10/26 河本担氏より、藤直幹関係資料を寄贈。
- 10/26 西山、国立国語研究所に出張。
- 10/27 高木町氏より、高木修二氏・一郎氏関係資料、尊攘堂関係資料を寄贈。
- 10/28 西山、大学出版部協会編集部会秋季研修会において「大学アーカイブズと学術コミュニケーション—京都大学大学文書館から考える—」と題して講演(於神戸タワーサイドホテル)。
- 10/31 『京都大学大学文書館だより』第11号発行。
- 11/1 ソウル大学校より、文書館業務視察のため来館。
- 11/2 高エネルギー加速器研究機構より、文書館業務視察のため来館。
- 11/3 第1回ホームカミングデイにおいて、京都大学の歴史について説明。
- 11/7 湯川秀樹・朝永振一郎生誕百周年記念展示「一中・三高・京大—二人が学んだ学校—」開催(～2007年1月28日。於京都大学百周年時計台記念館歴史展示室)。
- 11/9 西山、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会において「大学からアーカイブズを考える—京都大学大学文書館の活動から—」と題して講演(於岡山衛生会館)。
- 11/10 東海大学より、文書館業務視察のため来館。
- 11/15 大学文書館教員会議。
- 11/16 神戸新聞、「学徒出陣」調査につき取材。
- 11/18 西山、広島京大会総会において「京都大学の歴史—創立期を中心に—」と題して講演(於メルパルク広島)。
- 11/24 木村磐根氏より、第三高等学校記念アルバムを寄贈。
- 11/29 大学文書館所蔵の非現用法人文書の一部を廃棄(～12月1日)。
- 12/2 京都橘大学より、大学文書館施設見学のため来館。
- 12/13 大学文書館教員会議。
- 12/18 2005年度保存期間満了の事務本部および各部局の法人文書搬入(～22日)。
- 12/18 土岐憲三氏より、比企忠関係資料寄贈。
- 12/19 アジア歴史資料センターより、資料整理のあり方につき視察のため来館。
- 12/23 科学研究費研究会「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」2006年度第2回研究会開催(於神戸大学)。
- 12/25 学外より、第三高等学校校歌・寮歌について照会。
- 2007/1/9 柳澤哲明氏より、京都帝国大学新聞綴込を寄贈。
- 1/12 学外より、元文科大学講師の履歴について照会。
- 1/22 大学文書館教員会議。
- 1/24 学外より、京大における原爆研究について照会。
- 1/25 学外より、戦前・戦後の農学部校舎・演習林について照会。
- 1/29 清水、国立国語研究所へ出張。
- 1/30 清水、平成18年度公文書館実務担当者研究会議に出席(～2月1日。於国立公文書館)。
- 1/30 文学部二十世紀学研究室主催展示「ビジュアルジャーナリズムを切り拓く 元祖オタク大伴昌司の世界」開催(～2月23日。於京都大学百周年時計台記念館歴史展示室)。
- 1/31 『京都大学大学文書館研究紀要』第5号発行。

- | | |
|---|--|
| <p>2/ 6 長尾周幸氏より、長尾雄治関係資料を寄贈。</p> <p>2/16 西山、東京大学に出張(～17日)。</p> <p>2/19 上原真人氏より、浜田耕作関係資料寄贈。</p> <p>2/21 計盛鮎子氏より、京都大学招待状・英文概要を寄贈。</p> <p>2/22 生命科学研究所遺伝子動態学・井上研究室より、研究室修士・博士論文を寄贈。</p> <p>3/ 2 西山、明治大学史資料センターへ出張。</p> <p>3/ 6 第2回テーマ展「第三高等学校の歴史-明治・大正期を中心に-」開催(～5月6日。於京都大学百年時計台記念館歴史展示室)。</p> <p>3/ 6 西山、小樽商科大学百年史編纂委員会研究会において「年史編纂・文書館を考える-京都大学の事例から-」と題して講演(於小樽商科大学)。</p> | <p>3/ 7 長尾真氏より、資料寄贈。</p> <p>3/ 8 大学文書館教員会議。</p> <p>3/13 大学文書館運営協議会。</p> <p>3/15 西山、日本大学大学史編纂課へ出張。</p> <p>3/23 京都東ロータリークラブ「京大キャンパス見学とおもしろ教室」で中学生に展示案内。</p> <p>3/24 科学研究費研究会「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」2006年度第3回研究会開催(於京都大学)。</p> <p>3/26 河西助手、北海道立文書館へ出張(～27日)。</p> <p>3/29 西山、成蹊学園史料館へ出張。</p> <p>3/29 清水、東北大学史料館へ出張(～30日)。</p> <p>3/30 『『学友会関係資料』解説・目録』発行。</p> <p>3/31 事務補佐員村島亜純退職。</p> <p>3/31 事務補佐員齊藤紅葉退職。</p> |
|---|--|

大学文書館の動き

『学友会関係資料』および『第三高等学校関係資料』の公開を開始します

大学文書館では、『学友会関係資料』および『第三高等学校関係資料』の公開を5月16日に開始します。

前者は、1913(大正2)年に発足した教職員と学生の親睦団体である学友会(1941年に同学会に改組)に関する資料で、時期としては1910年代から60年代半ばまでで、合計106点あります。内容は学友会の組織運営に関する資料が中心で、特に戦前・戦中期の課外活動を中心とした学生生活を見るには不可欠な資料と言えます。公開に合わせて、資料の概要と学友会の歴史についての解説、資料の件名目録などを収録した『『学友会関係資料』解説・目録』も刊行します。

後者は、1950(昭和25)年に廃止された第三高等学校(三高)およびその前身校に関する資料で、学外との往復、庶務、経理等について記された三高の公文書にあたる基本資料です。今回公開するのは、明治2(1869)年から1887(明治20)年までのものが中心で、合計1310点です。ただし、これは同資料全体の約三分の一にしかなりませんので、残りの資料もできるだけ早い公開を目指します。

いずれの資料も、資料の長期保存および円滑な利用のため、一部の簿冊をマイクロフィルムに撮影しています。閲覧にあたっては、撮影分についてはその紙焼でお願いすることになります。また、冊子体の目録を閲覧室に配架し、目録データを大学文書館ホームページ(<http://kual.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/index.html>)に掲載します。

京都帝国大学法科大学教授・新渡戸稲造

— その着任と転任の一齣 — (下)

京都大学大学文書館助教 清水 善仁

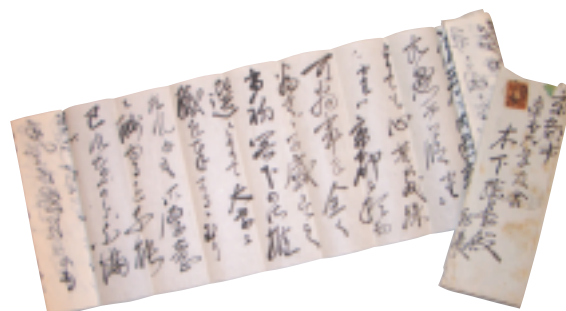
本誌前号では新渡戸稲造の京都帝国大学法科大学教授着任について触れたが、今号は第一高等学校校長への転任をめぐる諸相について記したい。

京大着任からおよそ2年、新渡戸は教授としての日々を過ごしていた。新渡戸の親友・宮部金吾（北海道帝国大学教授）による「新渡戸稲造小伝」には、新渡戸が「京都は学問研究にとり仙境であるとて喜ばれてをりました」とある（鳥井清治訳注『新渡戸稲造の手紙』北海道大学図書刊行会、1976年、157頁）。

新渡戸は京大で「殖民論」の講義を担当した。講義の個別テーマには、「近時殖民思想発達の理由」、「殖民の類別」、「殖民スル国民ノ性質」、「熱帯殖民」、「殖民地ノ母国ニ及ボス影響」を掲げており、「諸種の書籍参考仕候処、却々面白く相成、五章ハさて置き、拾章か式拾章位も講し度相成候」と、後藤新平宛の書翰のなかで、その様子を記している（後藤新平宛新渡戸稲造書翰〔後藤新平記念館所蔵「後藤新平文書」34-157〕）。

このように京都での学究生活を満喫していた新渡戸に、明治39年（1906）の夏頃から、東京の第一高等学校校長への転任話が持ち上がった。話の主は時の西園寺内閣の文相・牧野伸顕。なぜ牧野が彼を一高校長に推薦したのか、ジョージ・オーシロ氏は、牧野が「新渡戸こそ青年のモデル」と認め、「新渡戸のように外国人の前に出て臆さず、対等につきあえる国際人を育てる」ために彼を求めたと指摘されている（ジョージ・オーシロ『新渡戸稲造—国際主義の開拓者』中央大学出版部、1992年、106頁）。

牧野の周旋に対し、新渡戸は後藤に相談するなどして何度となく断った。「過去二年間、京都大学ニ対シ、十分尽スヘキヲ尽シタリトノ念ナリ、然ルニ、今日去ルハ心苦シキ限ナリトテ、主トシテ其迄ニ望ヲ置キ辞退致居候」の如くである。それでも牧野は諦めず、つい



木下広次宛新渡戸稲造書翰

に新渡戸も折れ、転任を受諾したのである。当時、文部次官であった沢柳政太郎が、京大総長・木下広次宛の書翰で「大臣、再三依頼之結果、本日漸ク無理ニ承諾ヲ得候」と述べたように、牧野の周旋がかなり強力なものであったことがうかがえる（以上、木下広次宛沢柳政太郎書翰〔大学文書館所蔵「木下広次関係資料」(以下「木下」)133-4〕）。

京大着任時と同様、転任に際しても新渡戸は木下に書翰を送った（以下、木下広次宛新渡戸稲造書翰「木下」185-1）。一高への急な転任に「閣下〔木下—引用者注〕始め、諸君ニ御迷惑相懸け候段、小生にとりても心苦敷」と述べた上で、京都時代を述懐している。「小生ハ京都ニ於而可為事を全く為さざる感有之、当初閣下ノ御推選ニよりにて、大学ニ職を奉するニ至りたれとも、御厚意ニ酬ゆるを不能、己れなから不満足ニ存候程なれば、閣下ニ於而ハ猶更ニ御思召候半、遺憾千万之至リニ存候、然るニ、兼而御高論も有之候通り、何処ニ在りて尽くすも同然なれば、転任後ハ一層勉強致候て、力を致す考ニ御座候」。

京大への着任に逡巡する自分の背中を押ししてくれた木下に対し、新渡戸はこれまでの回顧とこれからの決意を認めている。書翰を受け取った木下がこの書面をどのような思いで眺めたのか、それは分からない。明治39年9月27日、新渡戸は約2年勤めた京大を離れ、一高校長に就任した。